

「いのちの教育」の実践例に関する研究 ——看護学生が行う小学校の授業事例を通して

主査教員 松本誠一

福祉社会デザイン研究科 福祉社会システム専攻 修士課程

浅海卓也

1. 研究背景と目的

近年、学校教育において、児童生徒の「いのち」に関する教育内容の見直しが叫ばれている。2004年に発生した、「佐世保市小6女児童同級生殺害事件」を背景として、文部科学省は同年に、児童生徒の問題行動対策重点プログラムを取りまとめ、その中で、「命を大切に教育」が掲げられた（文部科学省 2004）。それ以降、教育現場では、様々な形で実践が行われており、呼称としては、「いのちの教育」（近藤卓 2003）等が用いられている。

しかし、「いのちの教育」に関する研究の内実については、実践報告や児童生徒が書いた感想の羅列等が多く、具体的に研究されているものは見当たらない。

以上のことから、本研究の目的は、「いのちの教育」を受けた児童が書いた感想文を分析することによって、児童が「いのちの教育」によって得るものの一側面を明らかにすることである。また、過去、先行的に行われた実践の授業内容や生徒の感想文等を分析し、差異を検討することで、当研究分野における一提言ができると考えられる。

2. 研究方法

研究方法は、以下の2つにより行われた。1つ目は、先行実践のレビューである。文部科学省の答申以前より学校教育の中で行われていた、「いのちの教育」の取り組みを概観し、授業内容や授業を受けた児童の感想等から、過去の実践の傾向を明らかにする。2つ目は、実際の教育現場で行われている「いのちの教育」への調査である。授業観察及び授業を受けた児童が書いた感想文の定性分析を行い、過去の先行実践との差異を明らかにする。

調査は、2017年7月に東洋大学福祉社会デザイン研究科研究等倫理審査委員会の承認を得て、2017年9月7日に行った。調査対象は、神奈川県横浜市にある公立小学校の第5学年に在籍する児童60名である。本調査にて行われた「いのちの教育」は、生命の誕生に関する内容である。人が誕生する確率や出産映像、妊婦体験等が教材として用いられ、授業は行われた。神奈川県の選定理由として、県知事の施策のひとつに「百万通りのいのちの授業」があり、それに基づき、県教育委員会では、県内のすべての学校種において行われた、「いのちの教育」の年間回数、授業内容を把握しているためである。年間回数を計算すると、一番数の少ない幼稚園においても、平均して週に1回以上、「いのちの教育」が行われており、他の学校種においては、年間100回弱行われていることが明らかとなった。ま

た、「いのちの教育」が行われた教科においても、道徳に留まらず、多くの教科で横断的に行われていた。得丸定子（2001）の定義によれば、「いのちの教育」は、道徳は当然のこと、特別活動、家庭科、社会科、国語、理科、保健体育、芸術教科、総合的な学習の時間等、さまざまな教科で適宜展開可能である。神奈川県においては、まさに定義通りに、日常の実践の中で、「いのちの教育」が行われていると判断し、調査対象とした。

3. 先行実践

先行実践としては、文部科学省の答申以前から、学校教育の中で行われていた「いのちの教育」の実践を取り上げた。その中でも、本調査と同様に小学生に対して授業が行われたことを選定理由として、鳥山敏子教諭（1980）、黒田恭史教諭（1990）、金森俊朗教諭（1989）の実践例を取り上げた。

過去の実践の傾向として、元々の「いのちの教育」は、平和教育や食育の要素を多分に含んでいたこと、行為の主体が生徒にあり、能動的で実感を伴う授業実践が行われていたことが明らかとなった。

4. 感想文事例の分析・考察

児童たちは、「いのちの教育」を受けたことによって様々な「気づき」を得ていたことが明らかとなった。「気づき」について、先行研究においては、自身の成長を促すための初歩的な段階としている。本研究では、「いのちの教育」を通して、生徒が得るものを「気づき」と定義した。先行研究と同様に、「気づき」が児童生徒の成長につながるものの初歩的なものとした。

感想文の分析には、定性的コーディング（佐藤郁哉 2008）を用いて行った。佐藤の指針に基づいて感想文を読み込み、帰納的にコーディングした。それにより、「かけがえのないいのちの気づき」、「気づきの分かち合い」、「気づきの探求」の3つが得られた。授業内容に沿った感想文の分析を行ったため、行われた授業内容ごとによって、児童が得た「気づき」の違いが明らかとなった。

「かけがえのないいのちの気づき」は、いのちが誕生することに驚きを感じた児童、それを自己のいのちに引き寄せて考えた児童、他者についても同様であることを考えた児童の3つのタイプが明らかとなった。「気づきの分かち合い」では、母親への感謝や理解を記述した児童、自己やきょうだいの誕生について関心を表した児童が確認できた。「気づきの探求」では、「いのちの教育」に対する児童の評価や「いのちの不思議さ」に関する記述が表れ、児童たちは、「いのちの教育」を肯定的に捉えていたと言える。いずれも、児童の「いのち」の認識について、変化を及ぼしていることが明らかとなった。

そして、授業内において、視覚的な認識を伴うものや自己の身体感覚を通じたものが、感想文中に多く表れ、児童の「気づき」を促すことが明らかとなった。このことから、「いのちの教育」によって得た「気づき」が、「いのち」についての認識に変化を及ぼすことが

言える。

5. 結論

感想文分析の結果から、「いのちの教育」が、児童の「いのち」の認識について、変化を及ぼすものであるとした。これは鳥山、黒田、金森の教育実践と本調査において行われた授業と共通する点であった。そして、また、児童の心に残る教材として、視覚的に認識するものや自己の身体感覚を通したものであることも共通する点である。一方で、「生き物」を扱った先行実践においては、人間以外の他の生き物の「いのち」についても、その認識を改めることが明らかとなり、本調査と先行実践との特徴的な点は、その点にあると言える。

しかし、児童の「いのち」に対する認識を変えること、「いのち」をより感じさせることに、「いのちの教育」が果たす意義があると言える。

事例数は少ないが、実証的な研究が少ない当研究分野において、これらの研究を積み重ねることで、「いのちの教育」の組織的・系統的な発展が推測される。

今後は、「死」を教材としたものや、福祉体験等の、他の「いのちの教育」や、宗教的背景を持つ児童生徒にも、着目し、視野を広げた研究を行っていきたい。

●引用・参考文献

近藤卓編，2003年，『いのちの教育』，実業之日本社

得丸定子，2001年，「学校教育におけるいのちの教育の重要性と取り組みについて」，『上越教育大学研究紀要』，第21巻，第1号，pp.11-19

鳥山敏子，1985年，『いのちに触れる 生と性と死の授業』，太郎次郎社

黒田恭史，2003年，『豚のPちゃんと32人の小学生 命の授業900日』，ミネルヴァ書房

金森俊朗，1996年，『性の授業 死の授業——輝く命との出会いが子どもを変えた』，教育資料出版会

佐藤郁哉，2008年，『質的データ分析法 原理・方法・実践』，新曜社

●参照サイト

大阪教育法研究会「文部科学省，2004年，児童生徒の問題行動対策重点プログラム」

<http://kohoken.chobi.net/cgi-bin/folio.cgi?index=sch&query=/notice/20041001.txt>

かながわ「いのちの授業」

<http://www.pref.kanagawa.jp/cnt/f417796/>